人形の君　1

人形の君　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19808578

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, ♡喘ぎ, SM

Twitterで書いていたSMの短い「人形の君」というお話のまとめです。「花瓶の君」の続きとなる話です。４話分を収録しています。♡喘ぎを含みます。倫理が少しアレかもです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

人形の君　１

「ＳＭ……って気持ちいいのかな……」
霊幻のアパートで、情事の濃厚な気配を残したまま、裸の霊幻がぽつりと呟く。
「あ？あー……まぁ、気持ちいいっちゃ、気持ちいいだろうが」
エクボは腕の中の霊幻の髪を指でもて遊びながら、心地良い疲れを味わっていた。
「エクボ、できるか？」
ほらきた。そう言い出すと思ってた、とエクボはため息をつく。
この間緊縛してから、霊幻はアブノーマルなプレイに興味を持つようになってきていた。
「できるけどよ、癖になるとヤバいぜ？」
「できるのか！？」
あ、ダメだこれ、霊幻がやるってきかないやつだ。
もう一度エクボはため息をつく。
「気持ち良くなるまで、時間かかるぞ。大体１週間ぐらいはかかる」
「……そ、それでも……やってみたいなー、なんて……」
「……じゃ、試しでやってみるか？でも合わないやつには合わないからな、嫌になったらすぐ言えよ」
期待に蜂蜜色の目をきらきらさせて、霊幻はこくこくと頷く。
「……今から俺がしたり言ったりすることで、本当に嫌だったら『ノー』と言え。お互いのセーフワードだ。それ以外の嫌だやめては俺は取り合わない。これがＳＭのお約束の１つだ。守れるか？」
「分かった」
「よおし、いい子だ」
ふわふわの霊幻の髪をエクボは撫でてくる。
「な、なんだよ、やめろって」
霊幻は照れて逃げようとするが、エクボはやめない。
あ、そうか。
ノーと言わないとやめてくれないのか。

「……」
それほど嫌というわけではない。霊幻はエクボの好きにさせていた。
「いいか、今から１週間、壮大なゴッコ遊びをするぞ。俺がご主人様、お前は人形だ」
「人形……」
「そうだ。俺は人形が大好きだ。お前は俺のコレクションの中でも特別な人形。俺が愛する人形はお前だけだ」
エクボが霊幻の腕を曲げ伸ばしする。まるで人形遊びをするように。
「お前は俺の愛する生き人形。俺の宝物、俺のオモチャだ」
「……っ、分かった……」
「お前は俺がいないと生きていけない。俺がいないとどうしていいか分からない。人形だから当然だな？」
「うん……俺はエクボがいないと生きていけないし、どうしていいか分からない」
ふ、とエクボは笑う。
「お前は可愛い人形だなぁ。俺がいないとダメなところ、大好きだぜ」
褒められて霊幻は嬉しくなる。
「んふふ……何か楽しいかも」
「お前さん才能あるかもなぁ。今からどうしたらいいか分かるか？」
「は？そりゃ風呂入って……」
「マイドール」
「あ、そっか。分かんねぇよ、エクボ。教えて？」
「そう、それでいい」
エクボはゆったりと霊幻に口付けて、霊幻の下半身に手を伸ばす。
「えっ！？今日はさんざんヤったじゃん！もうヤダって……ぁ、あ……！」
霊幻が非難を込めてエクボを見ると、エクボがにやにやと愉悦に瞳を歪めていた。
「マイドール、俺の霊幻、イく所を見せてくれ。俺の手淫にあえな

く屈して、淫らに精を撒き散らしてくれ」
はく、と霊幻は空気を食んで。顔を羞恥に赤らめながら、こくりと頷いた。
嫌じゃ、なかった。
「いいぜ、えーと……」
「ご主人様」
「いいぜ、ご主人様。アンタの気の済むように……っあ！」
霊幻の性感帯を知り尽くした手が、容赦なく霊幻を責め立てる。
「ゃっ、あっ、あっン、そんな、先っぽばっか、……出る……っ！」
「俺様は出せと言ったか？」
ぎくりと霊幻の身体がこわばる。
「あ……あ……」
「言ってねぇよなぁ？」
淡い絶望の色を浮かべながら、こくり、と霊幻は涙目で頷く。
「ん……ん……う、ぁ……」
霊幻は背筋を這い上がってくるゾクゾクした痺れに耐えながら、何とかエクボの手コキから逃げようと腰を揺らめかせる。
「気持ち良くてたまらないんだな？可愛いなぁ、霊幻。イきたいか？」
こくこくと霊幻が頷く。
「だぁめだ♡」
「ひど……っ！」
「そりゃあ、サドだからなぁ」
霊幻はシーツを握りしめて快感に耐える。
くちゃくちゃ、ぬちゃぬちゃと音でも耳を犯されて、まばたきをすると涙が流れた。
「いい子だな、お前は優秀なドールだ。俺の自慢の宝物だ。イきたいか？」
こくこくと涙をこぼしながら霊幻は頷く。
「可哀想になぁ、そんなにお腹をきゅんきゅん言わせてるのに、イかせて貰えないなんてなぁ」
「〰〰〰〰っ！」

もう、霊幻が『ノー』を口にしようとした瞬間に。
「イけ」
渋い声が耳に響いて、反射的に霊幻は背中を跳ねさせて射精した。
「ぁあああ……っ♡あ、あ……っ♡」
我慢しすぎて、快楽が増幅されて霊幻の目の前がチカチカする。
ものすごく気持ち良かった。
「いい子だ霊幻。可愛かったぜ。ご主人様にお礼は言えるか？」
「……イ、かせて、いただき、ありがと、ござ、い、ます……っ」
「よく言えたな。さすが俺の宝物だ」
……もう、このプレイやめようかな……と思い始めていた霊幻は。

翌朝エクボが豪華な朝食を作ってくれていたことで、気が変わった。

「人形のメンテナンスは主人の義務だからな」
霊幻の髪を乾かしながら、エクボは給仕してくれる。
『人形だから』という名目で思う存分甘えられるのは、いいかもしれない、と霊幻はバーニャカウダを齧りながら満足げな息をついた。

※

霊幻が朝のシャワーから戻ってくると、スーツや下着など着替え一式がそろえてベッドに置かれていた。
「至れり尽くせりじゃん……」
「こっち来い、霊幻」
「ん、む」
エクボはべったりと霊幻の顔に化粧水を塗る。
そしてヘアケアのオイルを塗り込みながら、ドライヤーで霊幻の髪を乾かしてやった。
「おまえさんはもっと綺麗になれる。本当はもっと美しいドールだ」
「はぇ」

「俺様に任せておけ」
なんだか恥ずかしいが、『ノー』と言うほどでもない。
「うん……」
エクボは服を着た霊幻の顔や首筋にしっかりと日焼け止めを塗る。
「マイドール、お前の肌は美しい。太陽光で傷付けるのを止めたら、もっと美しくなるぞ」
「そ……うなの？」
「そうだ」
エクボは霊幻の手にも念入りに日焼け止めを塗り込む。
「帰って来たらネイルで保護してやる。今日はとりあえずこのまま行くぞ」
「う、うん」
玄関に立って、エクボはじっと霊幻を見る。
「いいか、これからお前は『いつもの霊幻新隆』を演じるオートマタだ。上手にお芝居できるか？」
「おーと、また……」
「自動人形、自立人形とか、そういう意味だ。上手くできたら、ご褒美をやろう」
「……できるに決まってるじゃん」
恥ずかしそうに霊幻は吐き捨てる。
「ようし、じゃあ行こう」

※

いつも通りに霊幻は仕事をこなす。
芹沢、トメ、茂夫の相談所メンバーは、しかし明らかな違和感に首を傾げていた。
口数が少ないのだ。
「師匠、今日はどうしたんですか」
気になって茂夫が声をかけて、ギョッとする。
人形のような、虚無の瞳とかち合ったからだ。
「おれ、何かおかしいか？」
「い、いえ、おかしいという程では無いんですけど……」

声もあどけなく、オルゴールのように透き通って聞こえる。
すぐさま相談所メンバーは給湯室にエクボを呼び出した。
「エクボちゃん、霊幻さんに何かしたわよね？」
トメがじとりと憑依体のコワモテのエクボを睨み付ける。
「洗脳したの？そう言うことしない、って約束したよね？」
茂夫が少し怒りを声に乗せながら問い詰める。
霊幻とエクボは、５年前に相談所メンバーを巻き込んでかなりの大騒動の末に恋人になったのである。
悪霊であるエクボが無防備な霊幻を万が一にでも害さないよう、相談所メンバーがいつでも見てるぞ、という脅し付きで。
「今ちょっとしたゴッコ遊びしてんだよ！アイツからやりたいって言ってきたんだ」
「どんなのか、訊いてもいい？」
右手にバチバチと超能力をほとばしらせながら芹沢がきいてくる。
ほぼ脅しであった。
「あー、霊幻が俺の人形、俺がその持ち主、って遊びだ」
「……なんだ、本当にただのゴッコ遊びなのね」
ＳＭの知識の無いトメたちは拍子抜けしたように肩の力を抜く。
「恋人同士のお遊びだ。巻き込んですまねぇな」
「師匠を傷付けることじゃないのならいいよ」
茂夫たちはバラバラと給湯室から出て行く。
それに続いて出て行ったエクボは、不安そうにこちらを見る霊幻に苦笑して頭を撫でてやった。

※

「……ただいま」
アパートに戻った霊幻の声は暗い。
「おー、おかえり。……どうした、マイドール。今日も一日お疲れ様」
「うん……」
エクボが額に口付けるのを受けて、霊幻は顔を曇らせる。
「俺、いつもの俺になれなかった」

「……」
そのか細い声をエクボは聞き逃さない。
「そうだな。でもまぁ気にすんな。相談所のやつらも気にしてねぇことだしよ」
「うん……」
霊幻の顔は晴れない。
エクボは目を細めた。
「『罰』が欲しいか？霊幻」
「え、っ」
霊幻は顔を上げる。期待にキラりと目が輝いた。
「罰されて赦されたいか？俺様の完璧なドールに、いつものお前に戻るために」
霊幻の唇がわなないて。
「戻り、たい」
「よし、お仕置きしてやろう。ズボンを脱いでベッドに座れ」
霊幻は言われた通りにする。
エクボはクローゼットから黒いバラ鞭を取り出した。
「これからこの鞭でお前の太ももを打つ。痛えぞ。やめておくか？」
自罰的な傾向の強い霊幻は、むしろ恍惚として首を振った。
これで罰されて、赦される、と。
「じゃあ、いくぞ……！」
ヒュン、と鞭が風を切り、バチンと霊幻のももを打った。
「い、うあぁっ！」
鋭い痛みに霊幻が顔を歪め涙を浮かべる。すぐさまバラ鞭の数本の鞭の跡が鮮やかに赤く浮かび上がってきた。
「いい子だ、逃げなかったな……！これでお前は赦された。お前は完璧な、俺の自慢のドールだよ、霊幻」
「……えへ……」
霊幻はうっとりと笑う。
たった１日で、エクボに褒められるのが癖になってしまっていた。
「風呂に入って来い。しっかり日焼け止め落として、後ろの準備も忘れるなよ」

「……ん……」
言われるがままの霊幻をエクボは見送る。
自立や、責任。
それを徐々に奪っていくのが、エクボのＳとしてのやり方だった。
自己肯定感の低い霊幻に、『エクボの特別な人形』という別の自信を植え付けるのは、もしかしたら危ういかもしれないな、と密かに思う。
が、まあいいか、と悪霊は笑うのだった。
俺様に依存するのなら、それはそれで佳い、と。
「……エクボ、出たぞ」
下着だけ身に付けた霊幻がソワソワと立っている。
「ん、乳液塗るからベッドにうつ伏せになってろ」
ハチミツの香りのするボディー用の乳液を手に取って、エクボはベッドの霊幻の背中に塗り広げた。
「お前さんは本当に肌が綺麗だなぁ」
「ふ、ぁっ……」
足にも塗り広げる。
「足もスラッとしてて形がいい。俺様のお気に入りだ」
「ゃっ……ぁ、あ……」
ごろん、と霊幻を上向かせる。
「鞭化粧（むちげしょう）も白い肌に良く映える。正直、興奮する」
するすると敏感な鞭の跡を柔らかく触られて、ごくりと霊幻は喉を鳴らした。
「……俺様の霊幻……」
「ぁ、あぁアッ！」
囁かれながら胸に乳液を塗り込まれて、思わず霊幻の足がシーツを波打たせた。
「おれ、おれの……」
「ご主人様」
「俺の、ご主人様……」
手に乳液を塗り込まれながら、うっとりと霊幻はエクボに囁き返す。

俺のエクボ、と言うのは恥ずかしくっても。
ゴッコ遊びの、ご主人様、なら、霊幻は言うことができた。
「風呂入ってくるから、パジャマ着て待ってろ」
「うん……」
ゴッコ遊びを始めてから、初めての夜。
それへの期待に、霊幻は赤面が抑えられ無かった。

※

風呂から上がってきたエクボは……キッチリとスーツを身に付けていた。
「えっ」
スウェット姿だった霊幻は困惑する。これからヤるんじゃなかったのか、と。
エクボは濡れ髪をオールバックに撫で付けて、エアコンの設定温度を上げる。
「脱げ」
「え、っ」
ベッドに座る霊幻に、端的にエクボは命令する。
エクボはベッドの向かいにPCチェアーを持ってきて、敢えて尊大にその椅子に腰掛け、足を組んで見せた。
「脱げ、と言ったんだ。聞こえたか？マイドール」
霊幻の喉がごくりと鳴った。
「は……い、ご主人様」
どくどくと霊幻の心臓が煩くなる。
じっと見られているのを感じながら、霊幻はスウェットを脱ぎ捨て、下着とズボンを一緒に脱ぐ。
「脱いだ……ぞ」
「いい子だ、新隆。ベッドに座れ」
「……」
ビジネススーツを着た人間の前で、裸になるのはかなり恥ずかしい。
霊幻は無言でベッドに、縮こまるようにして座った。

「俺様は今から煙草を吸い終わるまで、俺の人形を鑑賞する」
シュボ、とチョコレートの香りのするタバコにエクボは火を付ける。
「意味は分かるな？」
タバコをもてあそぶ指先に、霊幻はクラクラした。
「わか、った」
「いい子だ。マイドール、俺の宝物。……足を広げろ」
「……っ」
ピッタリと閉じていた足を、霊幻はそろりそろりと広げる。
「そうだ。卑猥に、だらしなく、曝け出せ」
羞恥にじわじわと霊幻の顔が赤くなる。
「マイドール、手は後ろだ。そうだ、胸を突き出すように」
顔を羞恥に背けたまま、言われた通りにする霊幻に、エクボは思わず愉悦に目を細める。
「淫靡だぜ、霊幻。エロくてそそる」
エクボは舐め回すように霊幻の全身をじっくりと眺める。
（は、恥ずかしい……っ）
霊幻は恥ずかしさで手が震えてきた。明るいところで、エクボにこれほどまでにじっくりと見られるのは初めてだ。
そっとエクボを盗み見て、股間にテントを張っているのに、霊幻は、あっと衝撃を受ける。
エクボは興奮している。
この行為に、興奮している。
俺の裸を見て、興奮している。
ゾクゾクゾク、と愉悦が霊幻の背骨を走った。
霊幻には理由は分からない。感情に名前もつけられない。
だが霊幻はうっとりと微笑んだ。
それにエクボは満足する。
──それは、羞恥が気持ちいいという錯覚を、霊幻に起こすことができたからだ。
「マイドール、次のプレイに移ろうか」
エクボはタバコを灰皿に押し付けて、押し入れから目隠しと豪華な太い腕輪のようなものを取り出した。

「今日は目隠しと手枷を使う。大丈夫か？」
少し霊幻は考えてから、こくりと頷く。
「目隠しは突然怖くなることもある。そんな時は迷わずセーフワードを言えよ」
「うん」
エクボだから、まあ、大丈夫だろう、と霊幻は思った。
「じゃあ、アイマスクから行くぞ」
霊幻はそっとエクボの手でベッドに横たえられ、繊細な黒いレースで編まれたアイマスクを目にかけられる。視界が塞がれた。
「次は手枷だ。『これを付けられたら、手を使ってはいけない』、と言うことだ。分かったな？」
こくりと霊幻は頷く。
エクボは見事な金細工に大きなエメラルドが嵌められた特注の手枷の中にクッション代わりの布を仕込んで、それぞれ霊幻の手首に装着する。これまた細工の良い金の鎖で両手の手枷を繋いだ。
「柔らかい鎖だ。お前が本気で暴れたら切れる。高い細工モノだぞ、うっかり切るなよ？」
霊幻が息を呑んだ。
「霊幻……綺麗だ」
感極まってエクボは思わずもらす。
「動画撮っていいか？絶対外にはもらさないようにするから」
「そ！っれは……」
シャラ、と手枷の鎖が鳴る。
「……いい、よ……」
5年間。
それは、2人の5年間の重みが言わせた、信頼の一言だった。
「ありがとな、霊幻」
「ん……」
エクボは霊幻が良く映る位置にビデオカメラをセットする。
「すごく綺麗だ……早くお前にも見せてやりたいぜ」
「止めろよ……っ」
恥ずかしがる霊幻に。
エクボはこっそり心臓を押さえてくずおれる。

（俺様の霊幻ががわ゛い゛い゛っ！！！！）
たまらなくなってひっそりと感動にエクボは涙を流す。Ｓとしては見せられない姿だが、霊幻が目隠しをしている今なら悶え放題だ。
「エクボ？」
おっといけない、とエクボはシャンと立ち上がって襟を正す。ちゃんとご主人様をやらなくては、と。
「お前は本当に可愛いナァ」
霊幻にのしかかり、ベロ、とカメラに見せつけるように乳首を舐め上げた。
「ぁ！んっ、か、わいく、ないって……！」
「いいや可愛い。お前は可愛いよ、マイドール」
「ゃ、あっ、ぁあっ、んんん……ッ！」
視界を塞がれて敏感になっている身体を、好き勝手にいじられて、霊幻はシャラシャラと鎖を鳴らしながら身悶えした。
「あぁ、んッ！ゃ……あ、ああ！」
ましてやエクボがしっかりと時間をかけて開発した乳首である。舌で、指でいじめられて、喉が反った。
「乳首気持ちいいか、霊幻？」
「み、れば、分かる、だろぉ……っ！」
「ダメだ、ちゃんと言え。出ないと乳首でイクまで責め続けるぞ」
「……っ！」
もじ、と霊幻が足を擦り合わせる。慣れた身体が、下半身への刺激を求めていた。
「ち、ちくびきもちいい……」
「よぉく言えたな？偉いぞ、霊幻」
頭を撫でられて、霊幻は恥ずかしさが増す。
「う、うぅ……」
エクボはローションを指に絡めて温め、霊幻のアナルに塗り込んだ。
「アァっ」
待ち望んだ刺激に霊幻の口からため息のような声がもれる。
「あ、ああっ……ぅ、んっ……は、ぅっ……」
「アナル気持ちいいなぁ、霊幻？」

「うん、アナルきもちいい……」
エクボはにやりと笑った。少しずつ霊幻に、淫語を口にするクセを付けられてきた。
「んっ」
エクボは指を抜いて、軽くティッシュで拭ってから前を寛げて逸物を取り出し、コンドームをつける。
「あ……」
両足を持ち上げられて、霊幻が身構えた。
「は、ああうっ！」
ずぐぐと一気に半分ほど挿入されて、ピンと霊幻の足に力が入った。
「ァ、んっ、んうっ、あぁっ、」
そのまま奥まで犯されて、掠れた甘い声が霊幻から漏れる。
「チンポ気持ちいいなぁ、霊幻？」
「うんっ、ちんぽきもちいいっ、」
霊幻の足がエクボに絡みつく。
「あっ、はぁっ、あ、あぁんっ♡」
──拘束されて抵抗できない。
（だからあられもなく喘いでも仕方ない）
『赦し』を得ている霊幻は、いつもより激しく乱れる。
「可愛いナァ、霊幻」
「……っ、やめろよ、こんなオッサンに……！！」
エクボは片眉を上げる。
「ぁっ、あ♡イっ……え！？」
もうちょっとでイける、という時にエクボが動きを止めた。
「な、なんで」
「今日はお前が自分が可愛いって分かるまでイかせてやらねぇ」
「は！？」
「ほらほら、また動くぞ」
「えっ、ちょっ、ア、ンっ♡」
ずちゅずちゅと前立腺を刺激され、奥を穿たれて、霊幻は高みの手前まで追い詰められる。
「ゃ、あ……♡」

イく、と思った瞬間に。
「お、い……っ！」
またエクボの腰が止まる。
「これは先に俺がイっちまうかもなぁ？」
「……っ、お、俺は、か、かわいい、からっ……」
「ん？」
「んぉっ♡♡♡」
ずん、と奥を突かれて霊幻は甘イキする。
「俺は可愛いから、イかせて……っ♡っああああああ！！」
とたんに激しく抽挿されて、ぎゅううとスーツの背中を足で締め上げてしまう。
「ほんとに可愛いな、新隆……っ！」
「おれぇ……♡かわいい……♡♡♡」
カリの張った逸物にえぐられてピクピクと震えながら霊幻はメスイキを味わう。
気持ち良く絶頂する霊幻の内部のウネリを味わいながら、「可愛い」と呟いてエクボもぶるりと吐き出した。

※

エクボが用意したシルクのネグリジェに手を通しながら、霊幻はまだぽやぽやとする気持ちを上手く収められていなかった。
（『俺可愛い』、だなんて）
プレイ中とはいえ、いい年してよく言えたものだ、と思い出しては霊幻は恥ずかしくなるのだ。
「霊幻、ソファーに座ってくれ」
「あ、うん」
霊幻は何も思わずエクボの言う事をきく。
それがＳＭプレイを始める前の、今までの霊幻ではあり得なかったことであるのを、彼は気が付いていない。
（ここまでキレイにハマると心配になってくるな）
そう思いながらも、エクボはプレイをやめない。やめる理由が無い。

（自分嫌いのコイツに、自信を付けさせてやって何が悪い？）
付き合って５年。色んなことがあって、２人の信頼は揺るぎないものになった。だが５年、霊幻を観てきたからこそ、エクボはその『心の隙』に対する危機感が膨らみ続けていた。
（自分を大切にしない奴は、簡単に自己犠牲を選択肢に入れる）
それは霊幻の仕事では致命的に成りかねない。それを霊幻に言葉で伝えて、本人から『気を付ける』と言質を取っても、一向に改善される気配が無かった。
エクボが生きた心地がしなかったのはあかぐろ様の時だけではないのだ。もう死んでるのにこはいかん、とエクボは言いたくなる。
（俺様に支配されるってことは、全てを管理されるって事は、究極に言ってしまえば赤子のように全てを預けて甘えるってことだ）
その味をおぼえた人間がどうなるのか、エクボは知っている。
（こいつはそれぐらいで丁度いい）
霊幻の前にひざまずいて、爪に美容液を塗りながら密かにエクボは笑った。
「甘皮取るからな」
エクボはうやうやしく霊幻の手を取りながら、壊れ物を扱うように丁寧にその爪を整えていく。
「保護ネイルを塗るぞ。大丈夫だ、健康的な爪色に見せるマットタイプのやつだから、仕事には差し支え無ぇ」
みるみるうちに美しく整えられていく手に、霊幻は目を見張る。
「綺麗……」
「当然だ。この俺様が手入れしてるんだぞ。お前は俺の最高傑作になるんだ、マイドール」
霊幻がうっとりと別人のようになっていく自分の腕を見る。
「俺がエクボのお人形……」
「そうだ、霊幻。お前は美しい。俺の美しい人形だ」
「うん……」
うっとりと肯定する霊幻にエクボは目を細める。
「いい子だ。愛してるよ、マイドール」
「うん」
『愛されている』を肯定する霊幻に。

大した進歩だ、とエクボはこっそり感心した。
そして愛の言葉を否定され続けた５年間を思い出してこっそり心の中で泣いた。

※

「またあのお客さんだ」
芹沢がヒソヒソとエクボやトメに耳打ちする。
「もし度を越すようだったら今日は俺が止めるよ」
その中年男性は、霊幻への好意があからさまで、最近ではボディータッチという名のセクハラが酷くなっていた。
先日トメがやんわりと注意したのだが、どこ吹く風だったので、今日は芹沢の出番かもしれない、というわけである。
ところが。
「あっ」
今日は、霊幻が触られそうになった手を、さっと引っ込めたのである。
「すみません、肌が弱いもので」
さすが所長、営業スマイルも忘れない。
出鼻を挫かれた中年男性は、その後も大したセクハラはせず、おとなしく呪術クラッシュを受けて帰って行った。

「今日は上出来だったじゃねぇか。セクハラ親父をかわしてて、見てててホッとしたぜ」
アパートに戻ってエクボは霊幻の頭を撫でる。
撫でられながら気持ち良さそうに微笑む顔が、思い出したように曇った。
「でも、２回も触られた。エクボ、お仕置きしてくれよ。スッキリしたい」
「……分かった。バラ鞭でいいか？」
「うん」
霊幻はズボンを脱いでベッドに腰掛け、ふとももを差し出す。
「いい子だ、霊幻。２回打つぞ、数えろ」

「ん、わかっ、たぁあっ！！」
ヒュ、と鞭が風を切って、霊幻の太ももをバチンと打ちすえる。
「いっ、かい」
「そうだ」
また、鞭が振られて、ふとももに紅い線が増やされた。
「う、ぁあっ！！に、かい！」
じん、と痺れる鞭の跡に、ウットリと霊幻は目を閉じる。
罪悪感からの解放に、気持ち良く浸っていた。
「そうだ。２回打ったぞ。これでお前は完璧な人形だ」
「ん……」
恍惚として微かに兆している霊幻の元に、エクボは鞭化粧を冷やすための保冷剤を、濡れタオルに包んで持ってくる。
「今日は手を触られるの嫌だったんだな。いつも拒んでいいんだぞ、あんなの」
「だって、今日はせっかくエクボが綺麗にネイルしてくれてるのに、触られたく無かったから……」
そう言われて、えもいわれぬ達成感のようなものがエクボの全身をつらぬく。

それは庇護欲とも征服欲とも呼べるような、呼べないような、複雑な感情であった。

続